

事業名称	えんがるの宝を活用した歴史観光プロジェクト			
実行委員会	えんがるの宝を守り、未来につなげるプロジェクト実行委員会			
中核館	遠軽町埋蔵文化財センター			
	住所	〒099-0111 北海道紋別郡遠軽町白滝 138 番地 1		
	TEL	0158-48-2213	FAX	0158-48-2374
	ホームページ	http://engaru.jp/geo/		
構成団体	白滝ジオパーク推進協議会、特定非営利活動法人えんがるジオ倶楽部、特定非営利活動法人丸瀬布昆虫同好会、遠軽町ウチダザリガニ防除ボランティアグループ ジオ・ザリ・クラブ			
事業開始時点の課題分析	<p>「遠軽町埋蔵文化財センター」は、重要文化財指定資料を含む国指定史跡「白滝遺跡群」出土品を中心とする考古資料の展示・収蔵施設である。本施設では、白滝黒曜石原産地の見学、学芸員による展示解説、石器づくり体験を一連のプログラムとして実施し、学校教育だけでなく地域の体験観光の拠点として利用されてきた。年間利用者のうち、約半数以上を個人及び団体観光客が占めており、そのうち約 2 割が道外からの観光客である。しかしながら、本施設周辺には飲食店がなく、宿泊施設を利用する場合も約 40km 離れた遠軽市街地方面へ向かわなければならない。このような状況から、北海道中央部から北海道東部へ向かう観光ルート上の通過点となっており、本施設の利用と地域の観光とが有機的に結びついているとは言えない。</p> <p>一方で、遠軽市街地には名勝ピリカノカの 1 つである瞰望岩（インカルシ）が位置するほか、町内にはアイヌ語地名の残された自然景勝地が点在している。また、明治期の北海道中央道路開削という歴史的背景のある国道上にこれらが点在しており、地域の文化財や自然景勝地を 1 つのルートで迎えることができる。したがって、本施設の利用と地域の観光振興とを結びつけるためには、これらを面として一体的に整備し、発信する必要がある。</p>			
事業目的	<p>地域に点在する文化財及び自然景勝地を面的に整備し、地域の観光振興に寄与するため、北海道東部オホーツク地域への玄関口にあり、地域の体験観光の拠点となっている本施設を中核館として位置づけ事業を実施する。本施設のある遠軽町は、4 町村合併により平成 17 年に誕生した町であり、旧町村地域の市街地に観光施設や宿泊施設が集中している。また、利用者の目的もそれぞれ異なり、3 次産業が中心の遠軽市街地はビジネス客による利用が多く、1 次産業が中心の他地域は農村体験やキャンプなどの野外アクティビティのほか、スポーツ合宿などにより利用されている。</p> <p>目的の異なる利用者をつなぐための様々な取組みがこれまでなされてきたが、目に見えた効果は上がっていない。各地域にある見所や施設などのモノをただ単に利用するだけでは、利用者に魅力は伝わらない。地域にはその自然の上に成立した歴史や文化があり、利用者がそのストーリーを知り、理解することで初めて地域のつながりと魅力が伝わるものとする。</p> <p>本事業では、地域に点在する文化財や自然景勝地をストーリーでつなぎ、さらにサブカルチャーと融合した手法により幅広い層に対しその魅力を発信することで、地域の観光振興への寄与を図る。</p>			
事業概要	<p>上記の目的を達成するために、本事業は以下の事業によって構成する。</p> <p>【事業① えんがるの宝を活用した観光イベント・ツアーの実施】：地域に点在する文化財及びアイヌ語地名の残る自然景勝地をストーリーでつなぐためには、北海道の名付け親と言われる松浦武四郎が切り口となる。武四郎による踏査の記録には、名勝指定地であり町名の由来となっている瞰望岩（インカルシ）が登場し、さらに本地域から産出する黒曜石の記述もなされている。また、武四郎研究者として著名な秋葉實氏は本町丸瀬布出身であり、膨大な研究記録が残されている。このような本地域に関わる人々の業績から歴史を紐解いて行き、地域の文化財や自然景勝地が一体的なものであることに気づくことができる観光イベント及びツアーを、観光協会及び宿泊施設等と連携し実施する。</p> <p>【事業② 幅広い層を対象とした文化財のわかりやすい情報発信】：文化財や自然景勝地の理解は、文字と写真で構成された解説看板や展示パネルのみでは、情報の伝達に時間がかかる。さらに対象者の年齢や言語の違いによっては、その魅力が伝わらないことが多い。そのため、本事業では、誰もが一目でその文化財や自然景勝地の背景にあるストーリーに気づくことができるようなわかりやすい手法として、サブカルチャーと融合した情報発信を行う。具体的には、本町出身であり機動戦士ガンダムなどのアニメーターとして活躍する安彦良和氏にイラストの作画を依頼し、文化財や自然景勝地を紹介するイラストマップを作成する。このマップを活用し、事業①の地域周遊観光イベントを実施するほか、中核館において企画展を開催し、イラストから語られるストーリーと実物資料とを対比させることで理解を促す。これらの成果はデジタルアーカイブ化し、すでにインターネット上で公開している「えんがるストーリー」を更新し情報発信を行う。</p>			
実施項目	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携 <input type="checkbox"/>イ ユニークバニエの促進 <input type="checkbox"/>ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館 <input type="checkbox"/>エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p>			
実施体系	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 <input type="checkbox"/>イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人育成プログラムの開発 <input type="checkbox"/>ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 <input type="checkbox"/>エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/>ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 <input type="checkbox"/>イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発 			

<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>本事業による成果・効果は、地域の文化財や自然景勝地などの地域資源をテーマにその背景や成り立ちを伝えることを目的としたイベントにおいて、サブカルチャーと融合した手法による情報発信は、幅広い層にとって言葉や文字情報よりも地域資源の背景や成り立ちがイメージしやすく、理解度の向上につながっていることを確認できたことである。また、謎解き要素を組み込んだイベントを実施することで、10歳代を中心とする若年層でも楽しみながら地域の歴史に触れていたことを確認できた。本事業で66日間にわたって実施した地域を周遊する謎解きイベントは、スタート地点とゴール地点とした施設の通常人員配置で対応できるものである。アンケート結果から、イベント自体の満足度の高さもさることながら、地域資源の再認識及び理解度向上につながっていることが読み取れ、ガイド付きツアーや見学会のような案内人の存在なしに、参加者だけで「楽しみながら学ぶ」ことができる仕組みといえる。このような仕組みは人員を割くことなく、ある程度の期間にわたって開催でき効果を出すことのできる仕組みと言え、過疎化が進む本地域のような同様地域へのモデルケースになると考えている。</p> <p>また、参加者傾向と地域内での消費傾向から、当地域においては近隣（北海道東部オホーツク管内）からの参加者層が地域内でよく消費し、札幌市などの道央圏や旭川市からの参加者層は日帰り客が多く、あまり消費しないという傾向を把握することができた。今後は本事業で実施した地域周遊型のイベントなどは近隣市町村をターゲットとして設定し、道内外の地域から訪れる来館者に対しては宿泊を伴うようなプログラムの企画、開発が必要と考えられる。本事業をきっかけとして、今後も地域の観光協会や宿泊施設と連携し、地域経済に貢献できるような文化財の活用を図る。</p>
------------------------	---

【事業実績】

遠軽町埋蔵文化財センターを中核館として、旧町村各地域で活動する地域団体と共働したフィールドワークの実施及び、これらの地域団体と共働した企画展の2つの事業を実施した。

【1】 えんがるの宝を活用した観光イベント・ツアーの実施

(1) 地域周遊謎解きイベントの開催

- ・参加者数延べ 200人以上(7月21日～9月24日、66日間)
- ・イラストマップ(A4二つ折り、15,000部)を作成

(2) 歴史観光ツアーの実施

- ・計3回(7月28日、9月24日、10月3日～5日)実施
- ・参加者数延べ 27人



名勝インカルンを含む歴史観光ツアー

【2】 幅広い層を対象とした文化財のわかりやすい情報発信

(1) 企画展参加者数

- ・参加者数延べ 2,731人(7月21日～9月24日、66日間)
- ・サテライト展参加者数延べ 160人(9月26日～10月21日、23日間)

(2) シンポジウム参加者数

- ・参加者数 90人(9月20日開催)

(3) マスコミでの報道結果

- ・北海道新聞 7月18日朝刊、8月15日朝刊、9月24日朝刊、10月3日朝刊
- ・NHK総合「北海道のニュース」8月7日放送

(4) 成果物

- ・地域周遊謎解きイベント参加者を対象としたアンケート調査を集約、分析した実績報告書を作成し、ウェブにて公開を行った <http://geopark.engaru.jp/page-4199/>
- ・デジタルアーカイブ「えんがるストーリー」 http://story.engaru.jp/story_menu/short-story/person/

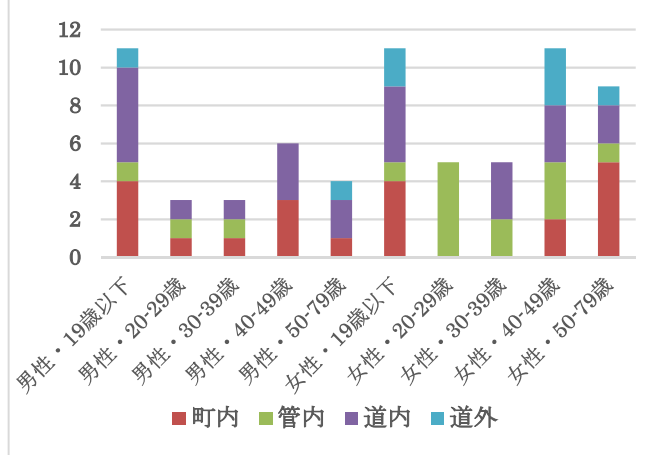


第2回企画展の開催と地域周遊謎解きイベントのイラストマップを活用した展示解説

(5) 今後の課題

本事業では、北海道の名付け親として知られる松浦武四郎をテーマとし、武四郎の旅の足跡を参加者が辿りながら地域の文化財やアイヌ語地名の残る自然景勝地を巡る観光イベント・ツアーを実施した。このようなテーマ設定から、参加者の年齢層が高いことが予測されたことから、遠軽町出身の漫画家、安彦良和氏作画のイラストを用いたマップを作成し、謎解き要素を組み込んだ地域周遊観光イベントとして実施した。本イベント参加者を対象としたアンケート調査から、参加者層は町内及び道内のファミリー層が主体であったほか、オホーツク管内の近隣市町村

図1 観光イベント参加者層及び居住地



の20歳代から30歳代の女が一定数訪れており、これまでにない中核館の利用者層が認められた(図1)。また、イベントの満足度調査(7段階評価)では、「とても面白い(7)」「まあまあ面白い(6)」との回答が8割であった(n=66)。この結果から、幅広い参加者層から高い満足度を得られ、事業目標を達成できたと考えている。その他自由記載意見として、「安彦先生の絵が贅沢だった」、「謎解きゲームを通して町の観光名所を立ち寄れるのが良い」との意見があった。

観光イベントと同時開催した企画展の展示内容に関する理解度調査(6段階評価)では、「とてもためになった(6)」～「ためになった(5)」との回答は半数に留まった(n=68)。高評価の回答者は40歳代以上の町外参加者が多く、10歳代や、20歳代から30歳代の参加者は謎解きそのものに集中していたことが窺えた。観光イベントにおいては、名勝「ピリカノカ」の構成資産の1つである「瞰望岩」解説板に謎解きの問題を設置したことから、解説板記載内容についても理解度調査(3段階)を行った。その結果、解説板も見たと回答した参加者のうち「見てためになった(3)」との回答は約6割であった(n=64)。とくに女性の40歳代から50歳代以上の回答率が高く、子供連れの親世代が文化財の解説板に興味関心を示したと言える。また、解説板には名勝の地質学的な成り立ちを説明する動画サイトのQRコードを表示しており、この動画サイトのアクセス数を調べたところ、他の時期よりもイベント期間中のアクセス数の増加が認められた。

本事業を開催した7月から9月の施設全体(無料区間含む)の利用者数では、平成29年度2,943人であり、今年度2,731人と93%の減だった。一方、観光イベントの出発点とした観光案内所においては、7月から9月の利用者数は平成29年度3,098人、今年度3,287人と106%の増加が認められ、本事業の効果が少なからずあったものと考えている。

本事業の実施により、参加者層とそれに伴う消費傾向も読み取ることができた。今後は、ターゲットを定めた歴史観光イベント・ツアーの企画、開発を行い、観光、宿泊施設との連携を強化した上で地域経済への可視化を図っていくことが課題である。